

**校訓**  
 自主自律  
 誠実勤勉  
 心身健康

# 六高新聞



六戸高校からは出版委員2名が青森県代表として今回参加した。全国高総文では上位校の活動紹介の他に、参加した生徒たちと合同で交流新聞を制作する。初日は16時から生徒交流会があり、佐賀県に関するクイズが出題されたり、割り当てられた班の中で自己紹介を行った。クイズでは一番多く正解した班が複数あり、最終的にじゃんけんで勝敗を決めた。勝ったチームには、佐賀県白石町の特産物「しろいしみのりちゃん」のグッズが贈られた。予想外の景品だったためか苦笑する生徒もいた。

7月28日〜8月1日、佐賀県佐賀市の佐賀勤労者体育センターで、第43回全国高等学校総合文化祭2019さが総文新聞部門が開催された。

## 佐賀の見どころを知る 4泊5日の研修旅行



2日目の午前中は開会行事、表彰式、最後には新聞制作についての講演があった。

### 新聞制作

午後はいよいよ取材活動だ。48班が12コースに分かれ、佐賀県の遺産、歴史、自然などを取材した。普段は新聞制作に早

**東よか干潟**  
 ラムサール条約に登録されており、多様な生物の生息地となっている東よか干潟。佐賀市南部の東与賀干拓の南に広がり国内有数の規模を誇る。有明海の干潟の一部で、干満差は最大約6メートルと日本最大だ。34班では「有明海 東よかに生きる人と生き物」について知るため東よか干潟を

くても3日かかるところを、次の日の午前中には新聞を完成させなければならぬ。取材活動後のホテルでは、各自割り当てられた記事を作成した。中には、相当時間がかかり朝の4時に就寝したという生徒もいた。最終日、11時半が提出締切。時間通りに提出していた班もあれば、締め切りを大幅に過ぎ、12時半までかかっていた班もあった。制作が終わると体育館の至る所から完成を喜ぶ拍手が聞こえてきて皆で達成感を味わっていた。

午後はず、上位入賞2校による生徒活動報告が行われた。単に活動内容を発表するだけではなく、工夫を凝らしたものだった。全国大会に参加して知ったのだが、部活動として参加している高校がほとんどだった。そのため「新入部員の勧誘が難しい」ことが共通の悩みで、部員数の多い発表校では勧誘方法を動画にして披露した。視聴者を飽きさせない工夫は、新聞作りにも活かされているのだろう。

その後、交流新聞の講評と閉会式、来年の開催県である高知県への引き継ぎが行われ、2019さが総文は終わった。閉会式で、新聞部会生徒委員長から「佐賀の良いところを皆さんに知ってもらえて嬉しい。これからの各校の新聞作りで大いに期待している」と締めくくった。参加した生徒は疲れたと口にしながらも、充実感にあふれていた。同じ班の生徒との別れを惜しむ声が聞こえるほど、内容の濃い3日間となった。

最後に向かったのは佐野常民記念館。佐野常民は、日本に赤十字を導入して多くの人を救った偉人である。多くの人に医学を教え、人を救うため、また守るために生きた人だ。取材内容をまとめていくうちに気付いたことがあった。佐賀は隠れた偉人が多いということ。今の日本があるのは佐賀の偉人がいたからこそ成り立っていると実感した。班編集では、とても良い意見交換ができた素晴らしい新聞ができた3日間だった。

探訪した。ラムサール条約とは、湿地の生態系を保全するとともに、そこから得られる恵みを人々の生活に持続的に利用することを目的に制定された国際条約だ。

有明海では地域特有の漁業が営まれており、古来より生活の糧を得ている。また、ムツゴロウやワラスボといった日本の他の水域ではどこにも記

録が無い有明特産種が23種、有明海の外に瀬戸内海などのごく一部に限られた分布記録しか無い準特産種が40種以上生息している。しかも、国内有数の水鳥の中継地、越冬地ともなっている。希少な生物が多数生息し宝庫と呼ばれるほどだ。このように、人々の生活と深く密接な関わりをもつ有明海だが、その関係が崩れようとしている。東よか付近の地区に生息する生物のほとんどが絶滅危

惧種に指定されているのだ。地球温暖化や干潟に流れ着くマイクロプラスチックゴミの影響だ。人の暮らしを壊すのもまた人であるのは悲しいことだ。条約が求めるように、人間が賢明に判断する「ワイズユーズ」がもっと浸透するようにしなければならない。

